毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた寺院について

毛利藩主国廻り資料に見られる休泊施設 (その3)

TEMPLE USED BY THE LORD OF MOURI-HAN IN EDO ERA

Lodgings in materials on the tour of inspection by the lord
of Mouri-han Part 3

岡田 悟*

Satoru OKADA

The lord of Mouri-Han sometimes made the tour of inspection in Edo era. Through the examination of historical materials on these tours, the following results are ascertained.

- (1) Temples were used as a lodging by the lord.
- (2) Temple was composed of the main hall and the living quarters. Some temples had guest rooms in addition.
- (3) When temple was used as a lodging, dwelling of a lord and followers and cook-room were arranged over such a composition.

Keywords: Temple, lodging, lord, Mouri-Han, tour of inspection

寺院、休泊施設、大名、毛利藩、巡視旅行

1. はじめに

毛利藩主の国廻りに関する資料、および、国廻り時に休泊に利用された施設の概要については前稿その1 (文献1) で述べ、国廻り時の休泊地、休泊施設 (図1、表2) から休泊には①岩国、徳山等の支藩居館や須佐、阿川の永代家老家在郷屋敷、②三田尻、小郡等の御茶屋、③「庄屋所」あるいは「誰々所」と記されるような民家、④寺院が利用されたことを示した。これらの内、まず、御茶屋と呼ばれるものを対象に、次いで、御本陣と呼ばれた山陽道宿駅本陣、庄屋層民家を対象に、それぞれ、その1、その2 (文献1、2) で検討を行った。本稿では、御本陣、あるいは、御茶屋とも呼ばれたが実態は寺院であったものを対象に、同様の検討を行い、その1、その2の例と比較してみたい。

大名等の武士が寺院に休泊、あるいは、滞在した例は織田信長の本能寺の変を挙げるまでもなく、数多い。そうした折に寺院の建築や境内をどのように利用したかについては、広島藩主福島正則が元和3年 (1617) に上洛し建仁寺に滞在した時の研究 (*注1) 等があるものの

極めて少数であり、また、毛利藩主国廻りのような藩内巡視時の利用については全くない状況であり、本稿での検討は有意義なものと考えられる。

第3～6代毛利藩主国廻り時の休泊地、休泊施設名を一覧にした表2のうち、寺院に〰を記した (*注2)。各回とも全行程30箇所程度の昼食、宿泊施設のうち4箇所が寺院である。1度でも休泊に用いられた寺院は8寺数えられる (*注3) が4回すべてに利用されたものはない。また、宗旨別の内訳は浄土真宗4、曹洞宗2、臨済宗1、真言宗1であり、特定の宗旨に偏らず (*注4)、本藩内にも支藩内にも見られ、分布 (図1) にも偏りは見られない。明治8年に赤間神社へと替わった阿弥陀寺を除く7寺院は現在も存在している。

資料としては、表1に挙げた史料1～6 (*注5)、および、6代宗広国廻り時に利用された施設を描いたと考えられる一連の差図 (表2 F欄、山口県文書館毛利家文庫蔵) の内の教専寺、漢陽寺、色雲寺の差図を中心に用いた。これら3枚の差図について、原図に見られる平面構成上主要な書き込みを写し入れて図2～4に図化し

* 共立女子短期大学生活科学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

表1 国廻り史料

毛利文庫での分類番号と標題		史料に直接ひかれている標題	内容（一部）			史料 No
			目次	日記風記述	日程表（施設名称）	
六-2	吉就様初御入国御国廻り一巻、貞享元（1冊）	同左	ナシ	アリ	御泊付（ナシ）	1
六-5	御国廻り、元禄九（1冊）	同左	ナシ	アリ	御泊附（ナシ）	2
六-10	吉元公初御入国御国廻一巻、宝永五（2冊）	同左	目録（1～23）	道中之亭	御宿付之亭（ナシ）	3
六-28	宗広公御国廻記録、寛保二（5冊）	宗広公御国廻岩国記録（1冊）	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	4
		宗広公御国廻長府前記録（2冊）	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	5
		宗広公御国廻惣記録下（2冊）	目録（17～33）	ナシ	御宿附之事（アリ）	6
六-29	宗広公御国廻須佐阿川記録、寛保二（1冊）	同左	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	7

図1 国廻り時の休泊地

（*注6）、図3、4には原図写真も併せて載せた。また、これら一連の差図には含まれないが、第3～5代藩主の国廻り時に利用された高森の受光寺の絵図が遺されており、これも援用した。さらに、これら4寺院に現存する本堂等はいずれも藩政期にまで遡ることができる建築であり（文献7）、現状から得られる知見も併せて参考にした。

一方、各寺院の開基、縁起、堂塔等については、享保～文政に編纂された『防長寺社由来』（文献8）に詳説されている。この文献は本藩、支藩内の寺院、神社を対象に、各寺社からの書き上げを大庄屋、代官を経て藩の絵図方に収集し、編纂したものである。享保～文政は6代藩主国廻りが行われた寛保2年（1742）を含む時期であり、この頃の各寺院の建築の状況を知る手がかりとして利用できる。

2. 差図に描かれた寺院の平面構成

〔1〕色雲寺（三見、浄土真宗、図2）

6代藩主国廻りの前年の寛保元年（1741）に色雲寺から藩絵図方頭人井上武兵衛に宛てた由緒書（文献8第6巻、pp. 213～215）には、当時の色雲寺の建築について「一、当寺二世運旭代作事仕替、五間半＝七間

一、釣屋式間四方 一、補処三間＝五間（中略）

一、鐘楼八尺四面、享保廿一年現住代建替」

とある。2世運旭は、同書によれば元禄9年（1696）入院、享保12年（1722）隠居とされる。一方、現在の色雲

寺の建築は、この由緒書より後の寛政9年（1797）に建築された本堂（文献9第3巻、pp. 456）、寺伝から天保11年（1840）とされる四脚門（文献7、pp. 51）、昭和55年建築の庫裏（*注7）、および、年代不詳の鐘楼から構成されている。

一方、図2からは境内の全体構成を読み取ることができ、参道正面に本堂を、その左手に庫裏を配し、両者を式台を含む部分で連結している。本堂は梁行5間半桁行7間であり、由緒書に言う運旭が作事したものと規模が一致する。2間四方の釣屋（*注8）は御式臺の奥の8畳間に当ろうが、鐘楼は描かれず、また、由緒書の記載内容や順序から推して補処は本堂左手の庫裏に当たると考えられるが、建物規模が図と相違する。

図中に書き込まれている部屋名等はその1、その2に示した御茶屋、御本陣と共通し、宗広国廻り時の利用方法に対応するものと考えてよい。本堂平面は6室構成で、内陣右手、床が備えられた6畳の余間が御座間とされ、8畳の二ノ間、10畳の三ノ間までL字型に続いている。昼食時の利用のためか、浴室は設けられていない。内陣須弥壇前に御納戸とあり、左手余間には記録所と書き込まれている。庫裏には下手に御番食仕出所2ヶ所、竈が示され、台所の機能を果たしていたことが知られる。また、境内には御駕籠置所が設けられ、御座間が面する庭に参道から入ることができる門が設けられている。参道左手にある建物については不明である。

〔2〕漢陽寺（鹿野、禅宗、図3）

漢陽寺は表2に示す4回の藩主国廻りの内3回に宿泊に用いられたが、そればかりでなく、津和野藩主亀井氏の参勤交代時の宿泊にも用いられた（*注9）。安永2年（1773）の同寺からの由緒書（文献8第1巻、pp. 395～399）によれば、延宝5年（1677）の火災焼失の後、翌6年に「客殿廊廡庫庫」が建築された、とある。安永2年の時点では

「一、客殿 桁行八間半、梁行六間半

一、釣屋 桁行三間半、梁行四間

一、庫裡 桁行五間半、梁行八間半

表2 国廻り時の休泊地・休泊施設名

藩名	地名	A. 3代吉就、貞享元(1684) 史料1	B. 4代吉広、元禄9(1696) 史料2	C. 5代吉元、宝永5(1708) 史料3	D. 6代宗広、寛保2(1742) 史料6	E. 国廻行程記の 書き込み	F. 差図の標題 () 内Noは☆参照
徳山	1奈古	01屋：御茶屋	01屋：御茶屋	01屋：御茶屋	01屋：徳山領御茶屋	御本陣	御茶屋(744)
	2宇田	01泊：御本陣ハ庄屋神吉所也	01泊：御本陣、庄屋甚左衛門	01泊：御本陣ハ神吉	01泊：御宿主金子神吉	御本陣	御本陣金子神吉所(745)
	3須佐	02屋：越中他屋	02屋：越中他屋	02屋：越中他屋	02屋：益田越中田屋	御本陣	御本陣益田越中(747)
	4江崎	02泊：御本陣ハ酒屋忠右衛門所也	02泊：御本陣、教専寺	02泊：御本陣ハ真宗教専寺也	02泊：御宿主真宗教専寺	御本陣	御本陣教専寺(749)
	5弥富	03泊：御本陣ハ百生平七家也	03屋：御本陣庄屋有田善右衛門所	03屋：御本陣、庄屋有田治口門	03屋：御宿主有田善左衛門	御本陣	御本陣有田善右衛門所(748)
毛利	6鷺年	04泊：御本陣、椿勘左衛門	03泊：御本陣、庄屋孫左衛門	03泊：御本陣、庄屋有田治口門	03泊：御宿主有田善左衛門	御本陣	御本陣有田善右衛門所(750)
	7徳佐	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御宿主有田善左衛門	御本陣	御本陣有田善右衛門所(751)
	8柚木	05屋：御本陣、伊藤市兵衛	05屋：御本陣、伊藤市兵衛	05屋：御本陣、伊藤市兵衛	05屋：御宿主河川与左衛門	御本陣	御本陣河川与左衛門所(752)
	9鹿野	05泊：渡邊寺	05泊：御本陣、岩崎長右衛門	05屋：御本陣、渡邊寺	05夜：御宿主河川与左衛門	御本陣	御本陣渡邊寺(753)
	10宮ノ原	06泊：御本陣ハ庄屋仁義所	06屋：御本陣、庄屋時高九郎左衛門所	06屋：御本陣、庄屋之宅	06屋：徳山領御茶屋	御本陣	御本陣渡邊寺(754)
徳山	11江瀬	07泊：御本陣ハ山代勘場也	06泊：御本陣、庄屋四郎左衛門	06泊：御本陣、庄屋之宅	06泊：御宿主河川与左衛門	御本陣	御本陣渡邊寺(755)
	12山代本郷	08屋：御本陣ハ庄ヤ与左衛門所也	07泊：御本陣ハ勘場也	07泊：御本陣ハ御茶屋	07泊：御茶屋	御本陣	御本陣渡邊寺(756)
	13志部前	08屋：御本陣ハ庄ヤ与左衛門所也	08屋：御本陣庄屋所	08泊：吉川勝之助殿宅(☆3)	08泊：屋敷	御本陣	御本陣渡邊寺(757)
	14岩国	09屋：内蔵殿宅(☆2)	09泊：勝之助殿屋敷(☆3)	09屋：吉川勝之助殿宅(☆3)	09屋：御宿主相川市郎右衛門	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(758)
	15高森	09屋：受徳寺	09泊：御本陣、受徳寺	09屋：御本陣ハ受光堂	09泊：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(759)
徳山	16花岡	09泊：御本陣役所之御茶屋也	10泊：御本陣、受徳寺	09泊：御茶屋	09泊：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(760)
	17徳山	10屋：土居	11屋：土居	10屋：御館	10屋：御館	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(761)
	18三田尻	10泊11泊：御茶屋	11泊12泊：御茶屋	10泊：御茶屋	10泊：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(762)
	19小郡	12屋：御茶屋	13屋：御茶屋	11泊：御茶屋	11泊12泊：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(763)
	20船木	12泊：御茶屋	13泊：御茶屋	12泊13泊：御茶屋(☆7)	13屋：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(764)
清末	21吉田	13泊：御茶屋	14泊：御茶屋	12泊13泊：御茶屋(☆7)	13泊：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(765)
	22清末	14屋：屋敷	15屋：館	14休：御茶屋(☆7)	14屋：御館	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(766)
	23長府	14泊：阿弥陀寺	15泊：御本陣、阿弥陀寺	14泊15泊：御館	14泊：御館	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(767)
	24赤間関	15屋：御本陣	16屋：御本陣	16屋：御本陣、庄屋治兵衛所	15泊：御宿主佐甲三郎左衛門	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(768)
	25福江	15泊：御本陣	16泊	16泊：御本陣甲斐守様御茶屋(☆4)	16泊：御宿主神宗妙晴寺	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(769)
毛利	26川棚	16屋：御本陣	17屋	17屋：御本陣、庄屋市之九宅	17屋：御茶屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(770)
	27宇賀	16泊	17泊：御本陣、海鏡寺	17泊：御本陣、海鏡寺	17泊：毛利宮内田屋	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(771)
	28阿川	17泊18泊19泊：御宿庄や入江孫兵衛	18屋：御本陣、庄屋久保平右衛門	18屋：御本陣、久保平右衛門宅	18屋：御宿主久保平左衛門	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(772)
	29井上	20泊：御本陣長井四郎兵衛場也	18泊：御本陣長井了意場場也	18泊：御本陣、庄や坂井六右衛門	18泊：御宿主戸助左衛門	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(773)
	30河原					御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(774)
毛利	31深川					御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(775)
	32瀬戸崎					御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(776)
	33三隅					御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(777)
	34三見					御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(778)
						御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(779)

注 01屋は行程第1日目の屋敷を、01泊は第1日目の宿泊を示す。

Aでは21日目に、B～Dでは19日目に帰城している。

☆1：Noは山口県文書館毛利家文庫目録の五八絵図の分類番号である。

☆2：内蔵は延宝7～元禄9に岩国藩主であった吉川広成を指す。

☆3：勝之助は元禄9～正徳5に岩国藩主であった吉川広成(ひろみち)を指す。

☆4：甲斐守は承応2～宝永6に長府藩主であった毛利綱元を指す。

☆5：須江(万)村に記されるが、宮ノ原は同村内にあった。

☆6：湯玉に記されるが、湯玉は宇賀本郷内にあった。

☆7：当初は「船木12泊、吉田13泊、清末14屋」の予定であったが、旅行中の急な変更で船木へ2泊したため

このような変則的な日程となった。

図2 三見御本陣色雲寺差図

図3 鹿野御本陣漢陽寺差図

図4 江崎御本陣教専寺差図

図5 高森御泊受光寺差図

- 凡例
- 座：御座(之間)
 - 二：二之間、二ノ間
 - 三：三之間、三ノ間
 - 納：御納戸
 - 記：記録所
 - 式：(御)式臺
 - 玄：玄関
 - 手：御手水部屋
 - 御：御覽部屋、御覽籠置所
 - 番：番所、御門番所、辻番(所)
 - 廊：御覽部屋、御覽籠置所
 - 湯：御湯殿
 - 佛：佛壇
 - 土：土間、土地
 - 板：板敷、板しき

表3 受光寺の建築の変遷

	本堂	庫裏	(御)座敷	鐘樓門
第Ⅰ期	文禄元年(1592)西善法師が久宗に創設建立			
	寛永年間(1624~44)久宗より高森へ移築		1600	
	延宝5年(1677)改築七間四方瓦葺	延宝5年普請本堂改築時の古木をもって	綱広国廻り(万治元年、1658.?)時に有懸りの座敷へ一間御仕構 延宝5年完成間梁3間半瓦葺	元禄2年(1689)鐘樓門建立
第Ⅱ期	[宝永4年(1707)受徳寺から受光寺へと改称]			
	元文2年(1737)大修繕	享保5年(1720)再建四間梁十間瓦葺	寛保2年(1742)破損 明和元年(1764)座敷其の外取構 安永5年(1776)大破、瓦葺修復	享保21年(1736)修繕、屋根葺替
			1800	
第Ⅲ期	文化4年(1807)再建	文化2年(1805)享保5年の庫裏存在		享和2年(1802)大修繕
	天保13年~弘化(1842~47)、梁行七間四方瓦葺★	同左、梁行五間桁行拾間瓦葺、他に御台所あり★	同左、梁行三間桁行拾間瓦葺★	同左、梁行老丈五尺四方瓦葺★

★は文献10により、他は文献4による

一、蔵 桁行四間半、梁行式間半

一、仏殿 四間四方

が存在していたことが記され、延宝6年に建築された客殿、廊廡、庖庫は、語義から、それぞれ安永2年時点の客殿、釣屋、庫裡に当ろう。6代藩主の国廻りが行われた寛保2年(1742)は延宝6年と安永2年の間に当り、これら3棟は図3に描かれていると考えられる。また、現存する漢陽寺法堂は18世紀中頃の、また、山門は18世紀末頃に比定される(文献7、pp.238)。

図3の書き込み中、佛壇や樓門は本来の寺院本堂の仏壇や門を示したものであろうが、他は図2とほぼ一致し藩主利用時の用法を示していると考えられる。図に描かれる建物の内、記録所、御駕籠置所とある所から左側の部分は、佛壇を中心とした構成を持ち、板縁を除いて桁行8間半梁行6間半の規模であり、由緒書に言う客殿に相当する。一方、右手の竈を中心とする部分は縦8間半横5間半の規模であり、由緒書の庫裡に相当しよう。両者を連結する御臺所、式臺からなる部分は、3間半の幅であり、梁行寸法が一致しないものの、客殿と庫裡とをつなぐ釣屋と考えてよからう。

客殿平面は色雲寺本堂と同様の6室構成である。左手余間に当る部屋が御座之間とされ裏手に御湯殿が続き、反対側の部屋が記録所とされてる点も色雲寺に共通する。御納戸も色雲寺と同様、佛壇前にあり、他所の例(*注10)で物置とされる部分と同様であったと考えられる。このような構成は色雲寺を左右対称に反転させた形であり、基本的な構成は共通していると言ってよい。

しかし、この建物へのアプローチ路を見ると、色雲寺では参道から本堂にも式臺にも達することが出来る形で

あったが、漢陽寺では樓門から入ると、式臺へは達することが出来ず、客殿前にのみ達することが出来る。客殿左手に唐門が設けられ、そこを入ると二ノ間縁に付せられた御駕臺に到達することから、これが宿泊時に藩主が出入りする際の動線であったと考えられる。

この他、由緒書に書き上げられている蔵は、図3で御殿を含む付属屋が、梁行が2間半であること、蔵に相応しい柱の配置状況であること等から、該当すると思われるが、なお不詳である。仏殿については図3に該当する建物は描かれていないが、形態が現在の法堂に類似し(*注11)、これに当るか、と思われ、そうであれば寛保2年以降安永2年までの間に建てられたことになる。また、図3に描かれる樓門平面は、現存する山門と柱配置が酷似し、樓門の名称も現山門が二重門であることと矛盾せず、法堂より早くすでに寛保2年には建築されていたと考えられる。由緒書に門に関する記述は全く見られないのは、省略されたものか、なお、疑問が残る。

[3] 教専寺(江崎、浄土真宗、図4)

『防長寺社由来』にある寛保元年(1741)の教専寺よりの書き出しには、教専寺が藩主等の休泊に対応して建築施設の整備を行ってきた経緯が記されている。まず、元禄7年「御上使当国御下向の砌御宿ニ被仰付、四間半七間ニ広り申候」(文献8第6巻、pp.663)(*注12)とあり、次いで、元禄9年第4代藩主吉広の国廻り時には「御本陣被仰付、四間半ニ拾壱間相成候事」(同)、宝永5年(1708)第5代藩主吉元の国廻り時には「又々修補相成候事」(同)とあり、表2に対応している。続いて、「当寺年久敷相成、未ノ八月大風吹破申ニ付御願申上御免被遊、五間ニ五間半の堂間数七ニ間」(同)、「式間半三間の御座の間建替仕候事」(同)、「三間ニ四間半のくり間数七ニ間」(同)、「つり屋式間四方」(同)と、建替や増築の記事が続いているが、これらが行われた時期を表す年号等は記されていない。第6代藩主宗広の国廻りは、書き出しの寛保元年の翌年に当るので、ここに示された変遷の最終的な結果の状況が図4に表されていると考えられる。

上記の記述によると、当初のものを元禄7年(1694)に4間半×7間へ拡張し、さらにこれを元禄9年(1696)に4間半×11間へ拡張したことになるが、この建物には名称が付されてなく、また、この建物と、未年(1715、1727、1739のいずれか)の破損を機に5間×5間半から5間×7間へ拡張した堂との関係が明確でない。御座の間は2間半×3間、庫裏は最終的には3間×7間、つり屋は2間×2間となっているはずである。また、現在の教専寺本堂は、寺記より、安政2年(1855)の建築とされる(文献7、pp.290)。

以上の経過を踏まえて図4を見ると、正面中央に向拝

を付した本堂を中心に左手に庫裏を、右手に御座之間を置く配置である。庫裏には御殿方向に突出した部分が付属した形で描かれているが、ここには柱型が描かれず、仮設のものであったかも知れない。この部分、および、左手と裏手の下屋を除いた庫裏の大きさは3間×5間半となり、書き出しに記される庫裏の寸法より若干桁行が短い。また、御座之間と折廻御縁通とを合わせた規模は2間半×3間で、書き出しの御座の間の寸法に一致する。書き出しに言うつり屋は玄関下手に位置する8畳間が相当しよう。本堂は板縁部分を除いて5間半×5間半（裏手では6間）であり、4間半×11間の建物とも、5間×7間の堂とも大きさが合致せず、なお、疑問が残る。

本堂は図2、3と同様の6室構成である（*注13）が、御座之間は右手余間ではなく、本堂右手に突出して設けられた部分にあり、それに御湯殿が付せられている。5代吉元が国廻り時に教専寺に宿泊した（表2C欄）時には「越中が伺御機嫌御出……御座間被召出御目見被仰付候」（史料3）とある。宿泊当日の昼に吉元は須佐の益田越中在郷屋敷を利用しており（表2C欄）、夜になって宿泊先の教専寺に越中が尋ねてきた状況が知られるが、御座間で御目見えしており、御座間でこうした儀礼的な行為が行われた。教専寺の平面構成を、御座之間が右手余間に設けられていた漢陽寺に比べると、本堂内に余裕が出来て内陣は御納戸、記録所それぞれ2室によって占められ、式臺も本堂内左端に移動してきた形となる。

庫裏には土間、長イロリ、竈等が見られる。参道突き当たりに位置する門と御座之間前の庭とは、仕切られて行き来出来ないようにも見受けられるが、御座之間縁に御駕臺が設けられていることから、漢陽寺と同様にここから出入りする動線を用いたと考えられる。また、本堂、庫裏とは別に御座之間を設けることは、書き出しに御座の間は「建替」であったと記されていることから、比較的早い時期から行われていた可能性が指摘できよう。

〔4〕受光寺（高森、浄土真宗、図5）

受光寺は宗広国廻り時には休泊に利用されず、従って表2F欄に示す一連の絵図には受光寺を描いたものはない。しかし、表2A～C欄に示す如く吉就、吉広、吉元時の3回にわたって利用されている。高森は三見、鹿野、江崎と異なって山陽道の宿駅であり（図1）、藩主国廻りの他にも藩政期全般にわたり毛利藩主、支藩清末藩主、巡見使等の休泊に利用されていた（文献4、pp.66）。

受光寺に遺される数多くの古文書、過去帳の類を基に受光寺の歴史を著した文献4があり、これを中心に受光寺の建物の変遷をまとめ、表3に示した。受光寺は久宗（地名）に文禄元年（1592）に西善法師によって創設され、当初受徳寺と称したが、寛永年間（1624～44）に高

森の現位置へ移転し、宝永4年（1707）受光寺と改称した（文献4、pp.44～62）。

主要な建物の変遷を見ると、まず、本堂は延宝5年（1677）「七間四方瓦葺本堂」（同、pp.56）が完成した。ここに言う本堂については、享保5年（1720）の記録に「40年余り前、開基西善法師が建立した本堂を改築した時……」（文献4、pp.72）とあることから、久宗にあった本堂を寛永年間の移転時に高森へ移築し（*注14）、それを延宝5年に改築したものと考えられる。この移築から延宝5年改築までの本堂を第Ⅰ期とする。延宝5年改築の本堂は文化4年（1807）に建て替えられており（同、pp.85）、延宝5年～文化4年の本堂を第Ⅱ期とする。文化4年に建て替えられた本堂は現在に至っており、これを第Ⅲ期とする。現在の第Ⅲ期本堂も7間四方瓦葺である。また、天保13年～弘化の地誌である『防長風土注進案』（文献10、以後『注進案』と略称する）の中で、高森が属する熊毛宰判下久原村の項には「眞宗受光寺」の建物が記され、

「本堂 梁桁七間四方外縁通り向拝共ニ瓦葺之事
釣屋 貳間四方瓦葺之事
鐘樓門 梁桁壹丈五尺四方瓦葺之事
庫裏 梁行五間桁行拾間瓦葺之事
御座敷 梁行三間桁行拾間瓦葺之事
御台所 梁行九尺桁行四間瓦葺之事
蔵 貳間梁桁行三間瓦葺之事
下人固屋 梁行四方（間か）桁行四間半瓦葺
長屋 梁行貳間桁行六間瓦葺之事
長屋 梁行貳間桁行三間半瓦葺之事」

とある。ここに言う本堂は時期的に第Ⅲ期のものに当たり、現状と規模が一致している。

次いで、庫裏に関しては、前述の享保5年の記録の続きに「……本堂を改築した時、その古木をもって庫裏を普請した」（同、pp.72）とあり、延宝5年に建築されたことが知られるが、その建築内容は不明であり、また、延宝5年以前の状況も不明である。この庫裏は享保5年に建て替えられ「四間梁十間瓦葺」（同）となり、文化2年までは存在していた（*注15）。『注進案』では、庫裏が「梁行五間桁行拾間瓦葺」とされ、これと享保5年に建築された庫裏との関係を見ると、下屋の存在を考えれば「梁行五間」と「四間梁」とは矛盾しないが、一般的に庫裏内に含まれると考えられる台所について『注進案』では別に梁行9尺桁行4間の御台所があったことが記され、両者の関係は明確にならない。現在の庫裏は昭和47年に建築されたものである。

また、座敷については、万治元年（1658）と推定される2代藩主綱広の国廻り時に「拙寺有懸りの座敷へ一間御仕構仰せ付けられ、御本陣に仰せ付けられ候」（*注16）とあり、万治元年以前からすでに本堂や庫裏とは別

の座敷があり、国廻り時の利用に応じて増築されたことが知られる。次いで、延宝5年の本堂の工事と同じ時に「間梁（梁間か）三間半の座敷萱葺を完成した」（同、p. 56）とあるが、これは新築建て替えか、あるいは、旧来のものの改修か、不明である。この31年後の宝永5年（1708）に国廻り中の5代藩主吉元は「同日（9月22日）御昼休高森也、御本陣ハ受光寺真宗也、御座間被為入御熨斗御配膳衆差上候」（史料3）とあるが、ここに言う御座間は宝永5年完成の座敷の中に設けられていたと考えられる。その後、破損や修復の記事が見られ、萱葺から瓦葺に改変された（表3）が、『注進案』に言う梁行3間桁行10間瓦葺の御座敷と宝永5年完成の座敷やこれら破損、修復との関係は明確でない。現在、御座敷に類する建物は遺されていない。

さらに、元禄2年（1689）に、鐘樓門が建設され（文献4、pp. 57）、寛保21年（1736）の修補、屋根葺替（同、pp. 74）、享和2年（1802）の大修繕（同、pp. 77）を経て、現在に至っている。『注進案』に言う鐘樓門もこれを指すと思われる、寸法も現状と矛盾しない（*注17）。

一方、「高森御泊受光寺差図」と題された絵図（毛利家文書五八絵図654、山口県文書館蔵）が遺され、これを図5に図化した（*注18）。これには、「御泊」の時の各部屋の使われ方を示すと考えられる朱書き、貼り紙が施され、藩主の宿泊利用時の絵図と推定される（*注19）。

絵図の題に「受光寺」とあり、絵図にも「高森市受光寺図」と書き込まれていることから受徳寺から改称した宝永4年（1707）以降であることが知られる。従って、第Ⅱ期以降の本堂が描かれていることになり、大きさも外縁を除いて7間四方である。

次いで、本堂以外の建物に目を移すと、本堂右手に庫裏が、本堂奥に御座敷とある棟がそれぞれ描かれ、往還から引き込まれた位置に本門が描かれる。庫裏は半間幅の外縁を除いて4間×9間半と判断され、享保5年に建て替えられ文化2年までは存在していたと考えられる4間梁の庫裏と寸法がほぼ一致するが、『注進案』に言う庫裏とは梁行寸法が異なっている。

また、御座敷は内縁、外縁を含んで3間半×7間半の建物に湯殿等と御膳立所（*注20）とされる6畳間とが付属してコの字形をしている。これを延宝5年に完成した御座敷と比べると3間半の梁行寸法が一致するが、『注進案』に記される御座敷と比べると桁行寸法が大きく異なっている。図5の本門は現存する鐘樓門と同位置に描かれ、6本の柱配置も現状と一致し、また、絵図から推定される規模も現状に矛盾しない。しかし、門扉の状況が現状と異なり、享和2年の大修繕以前の姿を描いていると考えられる（*注21）。

最後に、付属屋の状況を見ると、『注進案』に記される蔵、下人固屋、2軒の長屋に該当する建物はいずれも

図5には描かれていない。

以上、寺院名称、庫裏や御座敷の規模、鐘樓門扉の形態等から、図5は宝永4年（1707）から享和2年（1802）の状況を示し、従って、第Ⅱ期本堂が描かれていると考えられる。6代藩主宗広の国廻りが行われた寛保2年（1742）はこの期間内に含まれる。

図5によれば、往還より南から本門に入ると本堂と庫裏に、一方、敷地西側に沿った小路に設けられた門から入ると御座敷棟の玄関にそれぞれ達する。御座敷には書院床（付書院）、床、袋棚が備えられ、また、御座敷裏手には湯殿が設けられ、御座敷は図2～4に描かれる御座（之）間に相当し、また、図2～4に見られた御納戸には貼り紙で示された3畳の御物置が相当しよう。西側の門から玄関への通路には中門が設けられ、そこから御座敷前の庭へ通じている。本堂は図2～4と共通の6室構成で、正面に御拝（向拝）を付している。右手余間に位牌殿が設けられる点も他の真宗寺院に共通し、また、同じく浄土真宗である教専寺の現在の本堂と類似した平面形である。朱書き、貼り紙から、本堂、および、庫裏の北側部分は足輕、侍、中間、家老等の扈從する家士の詰所として用いられたことが知られる。図2～4ではこうした書き込みは見られず、また逆に図2～4に書き込まれている記録所が図5には見られないが、これら諸室は御座間部分と台所部分との間に設けられるのを原則としたと考えられる。庫裏の南側は、入口近くに土地、竈、板敷を設け、下臺所として用いられた。一方、これらから離れて御座敷棟に付属する形で上臺所、御膳立所が設けられていた。休泊者用に上臺所、下臺所の2室を設ける例は山陽道宿駅本陣に見られたが、いずれも近接して設けられていた（*注22）。配膳室が台所そのものから離れて御座間近くに置かれる例は規模の大きな御茶屋で見られ（*注23）、図5の状況はむしろこれに類似している。

上記差図類と同時期の18世紀における毛利藩とその支藩内の近世寺院の建築の平面については「寺院本堂では宗派にあまり関係なく、類似した横長の平面を六つに分割した内部をもつものが大多数を占めるようになり」（文献7、pp. 16）とあり、差図類に見られる本堂間取りと一致している。また、配置の面からはこれら本堂が「禅宗の庫裏にあたる生活部分棟との組み合わせで成立しているのが一般である」（同上）とあり、色雲寺、漢陽寺はこれと同様の、そして、教専寺、受光寺はこれに御座間を含む棟を付加した配置であると言える。

また、上記4寺院は史料中「御本陣」と呼ばれたものであったが、この他「御茶屋」と呼ばれたものの中で、支藩内に設けられ、本来寺院であるものを、支藩側が本藩藩主を馳走する場所の故に御茶屋と呼んだ例として、

宗広国廻り時の川棚の妙晴寺（表2 D E欄）が挙げられた（文献1）。妙晴寺での事例を具体的に示す資料は遺されていないが、上記4例のいずれかに類似した建築構成、利用方法であったと推測される。

3. 結び

以上4寺院を中心とする検討結果は、その1、その2（文献1、2）で得られた御茶屋、御本陣における結果を考え併せながら、以下のように要約されよう。

- [1] 御座間、家士詰所、台所の3部分が設けられており、この点は国廻り時に利用された御茶屋や御本陣と共通し、施設の性格によらず藩主の休泊に必要な部分であった。
- [2] 寺院は本堂と庫裏とを基本的な構成要素とし、この構成のままで休泊に利用される場合は御座間を本堂上手部分の内陣余間に設けた。また、この構成に加えて御座間1室を本堂上手に突出させたり、御座間を中心とする数室を別棟として設けたりすることも行われ、藩政期のかなり早い時期からこれらを常設的に設ける例も見られた。これは、その2で挙げた例において御座間が庄屋層民家の主屋内上手部分の座敷や本陣家の別棟書院座敷に設けられていたことに呼応する。
- [3] 台所部分は、庫裏内で本来台所機能を果たしていた土間部分を中心に設けられ、その2において民家土間を中心に台所部分が設けられたことと共通する。しかし、その2で指摘した、庄屋層民家に見られる、土間部分に床が張られたり、下手に台所部分が仮設されたりする傾向は、寺院においてはわずかに教専寺でこうした可能性が指摘されたのみである。また、御座間部分が別棟となった受光寺では庫裏内の下臺所と御座間棟に付属する上臺所、御膳立所とが空間的に離れた位置に設けられていた。
- [4] 御座間縁に御駕臺が描かれるものが2例あり、他の2例でも御座間前の庭へ直接入ることが出来る門を備えていた。藩主の出入りは御座間部分と臺所部分との間に設けられた玄関ではなく、御駕臺を用いていたと考えられ、寺院の門からのアプローチ路とは別の専用のアプローチ路を備える例も見られた。これは、その1に示した支藩内の御茶屋、および、その2の大部分の例と共通する。

表2に見られるように毛利藩主の国廻り時に利用された休泊施設としては、その1、その2、本稿で採り上げた御茶屋、御本陣、寺院の他、武士住宅と分類されるものがあり、これについてその4で同様の検討を行いたい。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、史料・絵図に関して山口県文書館の協力を得、また、色雲寺、受光寺の調査協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 1) 藤川昌樹『近世武家集団の居住形態に関する研究—寛永十一年將軍上洛時における京都を中心に—』私家版、1993.3、pp.33~37
- 2) 表2は文献1、2にも掲載したが、資料整理上のミスから若干の誤りがあることが判明した。しかし、文献1での国廻り全体についての記述に影響を与えるものではなく、また、文献1、2で対象とした御茶屋、御本陣に直接関係したものはない。本稿では以下のように訂正した。①A欄34三見：光国寺→光円寺、②B欄22清末：「館」を加える、③B欄とC欄28阿川：梅翁寺→海翁寺、④C欄22清末：14泊15泊→14休、⑤C欄23長府：「14泊15泊：御館」を加える、⑥C欄20船木21吉田22清末：（☆7）を加え欄外にこの解説を新たに設ける。
- 3) 高森にはA B欄に受徳寺、C欄に受光寺とあり、名称が異なるが、宝永4年（1707）に受徳寺から受光寺へと改称している（本文参照）ので同一のものである。
- 4) 藩政期における毛利藩内の宗派別寺院数を示す資料は見出せないが、現在の萩市内の範囲では2代藩主綱広時代に、多い順に浄土真宗37、浄土宗23、真言宗17、臨済宗17、曹洞宗10であり（文献9第1巻、pp.328~340）、国廻り時に利用された寺院には浄土宗のものが見られないが、全体的な傾向として偏りないと言ってよからう。
- 5) これら資料については文献1の「2. 毛利藩主国廻りとその資料」の項を参照。
- 6) 3枚いずれにも敷地寸法、建具種類は書き込まれていない。また、部屋の高さを示す畳数は御座間を中心に数室に書き込まれているが図2~4では省略した。
- 7) 庫裏は本来禅宗寺院での用語で、他の宗派の寺院で用いるのは適切さを欠く恐れも考えられるが、本文中に引用した受光寺（浄土真宗）の資料でも庫裏の語を用いており、本稿では宗派を超えて庫裏と呼ぶことにする。
- 8) 釣屋は『建築大辞典』（彰国社、1991.8）に「山口県の民家で主屋と別棟の納屋とを連結している渡り廊下部分」とあるように、接続部分の名称である。文献1図4、文献2図3等にもこのような釣屋が見られる。
- 9) 寛政12年（1800）亀井氏が宿泊した時について「本陣は漢陽寺に設けられたと推定される」（文献5、pp.684）とある。一方、元文2年（1737）上府時には津和野→柿市→六日市→津田→廿日市という経路を用いて鹿野を通過しておらず（文献6、pp.15）、定期的に利用されていたわけではない。
- 10) 同様に毛利藩主の宿泊に用いられた時の図と考えられる（注19参照）「舟木御泊正円寺差図」（毛利家文書五八絵図709、山口県文書館蔵）の構成、各部分の利用のされ方は図3に酷似し、外陣佛壇前の部屋の一部を仕切って御物置と書き込んでいる。
- 11) 法堂は「桁行三間、梁間三間」とされるが、寸法はそれぞれ8460mm、8410mmであり（文献7、pp.238）、正方形に近い平面である。
- 12) 「御上使」とは、前藩主急逝による4代吉広の襲封によって、藩政監査のため幕府から半年間派遣された、妻木彦右衛門、山中五郎左衛門の2名の御国目付を指す。
- 13) 図4では内陣中央に同断、記録所の2室が描かれているが、両者を隔てる壁の裏手の端には柱が描かれてなく、休泊利用に対応して仮設された壁であったと推測され、本来は6室構成であったと考えられる。
- 14) 西善法師は元和2年（1616）死亡と考えられ（文献4、pp.46）、元和2年は寺がまだ久宗にあった時代であることから「西善法師が建立した本堂」は久宗にあった本堂を指すとしてよい。なお、文献4に書かれる文書については「文書の中で漢文調のものは、特別に文障のない限り、文意を損ねない程度で書き下し文にした」（同、pp.157）とある。
- 15) 文化2年に受光寺の勤功を述べた内申書を差し出しているが、それに「享保五年第七世祖海代唯今の庫裏再建の節は（中略）四間梁十間瓦葺再建仕り、今以って御用に立ち有難く存じ奉り候事」（文献4、pp.81）とある。
- 16) 文献4、pp.79。注15に同じく文化2年の内申書に、「先年」と頭書きがされた後に記されている。また、文献1注2において2代藩主綱広の国廻りについての記述が各種資料に見られないこと

- を指摘したが、「教尊代、大膳太夫毛利綱広廻国の際、本陣を仰せ付けられた」(文献4, pp. 57)とあり、2代藩主も国廻りを行った可能性が強い。
- 17) 文献11の実測図によれば、鐘楼門の桁行間口は4680mm、梁行3157mmであり、桁行寸法は『注進案』に言う「壹丈五尺」とほぼ一致する。
- 18) 図5では元からのものと区別するため、貼り紙上に描かれた線を破線で、また、朱書きには()を付けて表した。元からの墨書きでは壁、襖、障子等の間仕切の状況や「板天井」等の仕上げを示す書き込みがされ、各部屋の畳数も書き込まれているが、これらは図5では省略した。
- 19) 誰がいつ利用した折の状況を描いたものか、が問題になるが、毛利文庫に数多く遺されている御茶屋、御本陣の絵図はほとんどが藩主の国廻りや藩内巡視の記録と対応するもので、希に幕府よりの巡見使等が利用した場合にはその旨が記されていること、受光寺は藩主が休泊に利用してきた経緯があること等から推して、この標題に言う「御泊」の主語は毛利藩主と考えて誤りなからう。毛利文庫にはこうした貼り紙や朱書きを加えた形式の図は、文献2図12等数多くみられ、いずれの例でもこれらの書き込みによる部屋名がほぼ共通し、かつ、本来の住宅や寺院として使用する限りは有り得ない名称がほとんどで、休泊利用時の使われ方を示すと考えて誤りない。
- 20) この上臺所、御膳立所からなる部分は、縦4間横1間半(1間=6尺とすれば9尺)となり、『注進案』に言う御台所と寸法が一致し、『注進案』で御台所が庫裏とは別に表現されていることとも矛盾しないが、上臺所が貼り紙で表され仮設であると考えられること、御座敷棟に付属する形と判断され、独立した棟を思わせる梁行桁行という表現に相応しくないこと、御座敷棟そのものの寸法が『注進案』と図5とで異なること等から、これには該当しないと思われる。しかしながら、『注進案』に見られる表記法は、このような庫裏内の台所から離れた膳立所等が『注進案』の時代にも設けられていた可能性を示している。
- 21) 図5では桁行間口全体に扉が設けられている表現になっているが、現状では長さの違う板壁を左右に(右側は潜り戸付き)従えた開き戸となっている。現状への改造について文献11, pp. 3では

「中央通りの扉構えなどは享和2年に現状に変えられた可能性がある。つまり元禄2年建立当初は中央通りの柱は両脇間を等寸法で割り付けていたのではなかろうか。中央扉構えが桁行の中央に位置するということである。」と指摘している。

- 22) 文献2図12の高森本陣相川家、岡田悟「毛利藩における宮市宿本陣兄弟家について」(『日本建築学会計画系論文報告集』第454号、pp. 173~180、1993. 12)に示した兄弟家等。
- 23) 岡田悟「毛利藩における三田尻御茶屋について」(『日本建築学会計画系論文報告集』第444号、pp. 127~137、1993. 2)に示した、第Ⅱ~Ⅳ期の三田尻御茶屋(図3~5)には、御座之間近くに御膳所、御茶間、御末が設けられている。

参考文献

- 1) 岡田悟「毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた御茶屋について—毛利藩主国廻り資料に見られる休泊施設(その1)」日本建築学会計画系論文集第464号、pp. 181~189、1994. 10
- 2) 岡田悟「毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた御本陣について—毛利藩主国廻り資料に見られる休泊施設(その2)」日本建築学会計画系論文集第472号、pp. 141~148、1995. 6
- 3) 『周東町史』、周東町、1979. 3
- 4) 市原伊男『松林山受光寺の沿革』松林山受光寺門信徒会、1983. 8
- 5) 『鹿野町誌』、鹿野町、1991. 7
- 6) 藤沢秀晴「山陰諸藩主の参勤交代」島根地方史研究20号、pp. 13~15、島根郷土研究会、1964. 12
- 7) 『山口県の近世社寺建築』(近世社寺建築緊急調査報告書)、山口県教育委員会、1980. 3
- 8) 『防長寺社由来』第1~7巻、山口県文書館、1982~86
- 9) 『萩市史』第1、3巻、萩市、1983. 87
- 10) 『防長風土注進案』第1~22巻、天保13~弘化、山口県立図書館蔵
- 11) 『松林山受光寺鐘楼門調査報告書』九州産業大学工学部建築学科佐藤研究室、1995. 6

(1995年9月10日原稿受理、1995年12月18日採用決定)